

も有べければ、異相なる人ありて、頭毛をぬき、髭をはへさせたらんには、皆人髭はへて昔男のなりひらとやいはん、

〔醒睡笑<sup>二</sup>貴人之行跡<sup>一</sup>〕大名の世にすぐれて、物見なる鬚をもちたまへるあり、あまりにひげをまじ、來るほどの者に、我がひげをばなにといふぞと問ひたまふ、たゞ世上に殿様のおひげを見るものごとに、から物と申さぬ者は御座ないと申しあへり、大名うちゑませたまひげに誰もさいふよと、ひげをなで／＼して、そこなる者こえよと、まねがせたまひ、身ぢかくよせ、さゝやきて、みづからひげをとらへ、弓矢八幡日本物ぢや、

〔枕苑日涉<sup>三</sup>〕男子剃面

黃門侍中剃面傳粉、漢以來已有之、在我邦、公卿以下皆剃面、未詳所始、多武峯護國院所藏鎌足公像、大蘇不退轉法輪寺所藏業平像、河内道明寺所藏菅公像、皆有鬚髯、則似當時未剃面矣、士庶剃面、蓋始于近代、土佐又平所畫人物、皆有鬚髯、則當時士庶未剃面、可以見已、洪邁俗考曰、世說載、何晏潔白、魏帝疑其傳粉、以湯餅試之、其拭愈白、知其非傳粉也、考魏略、晏自喜動靜、粉白不去手、則知晏常傳粉矣、前漢佞幸傳、籍儒閎孺傳、脂粉、以婉媚幸、上、此不足道也、東漢李固傳、章曰、大行在、殯、路人掩涕、固獨胡粉飾貌、搔頭弄姿、槃施偃仰、從容冶步、略無慘怛之心、顏氏家訓、謂梁朝子弟、無不裏衣剃面、傳粉施朱、以此知古者男子多傳粉者、

〔武江年表<sup>七</sup>〕文化十年五月、愛宕山別當圓福寺にて長鬚會あり、秋田侯の侍醫大關大中といふ人、所々の髭長き老人を集めて、書畫の會を催す所なり、七十にみとせの花を咲そへてまたな、そちの月をながめん

〔牛山活套<sup>中</sup>〕鬚髮

鬚髮ノ病ト云ハ別ニ苦コトナシ、只鬚髮ノ白ヲ世俗嫌故ニ、諸ノ醫書ニ皆白ヲ變ジ黒トナスノ